Over the "Smiling"

山形県東置賜郡川西町は山形県南部の置賜地域にあり、かつては米作りが盛んな農業の町でした。時代が変化する中で、専業農家は全盛期に比べ激減し、ほとんどが兼業農家であったり、会社勤めをしたり、その暮らし方は様々です。けれど、時代が変わっても、これまでの文化・風習・人づきあいは脈々と受け継がれています。この町で生まれ育って暮らすならば、背負うべき事のひとつです。

この町で暮らすこと。つまり、地域の中で「近所づきあい」をしながら暮らすということです。僕がこの町に移住して感じたことは、「冠婚葬祭を地域で行うこと」「近隣の家庭事情(良し悪し問わず)をよく知っていること」「町内の集まりが多いこと」など、どれも地域のつながりの強さに驚くことばかりでした。誰が、どこで、誰と、何をして暮らしていてもいいじゃないか?本人の自由でしょ?どうやら、そういうわけにはいかないようです。

昔ながらの地域のつながりや、固定概念が現代の暮らし方とミスマッチを生んで、若者を中心に窮屈さや不自由を感じることもあるようです。ああしなきゃいけない、こうしなきゃいけない、昔からこうしてきた、こうすると決まっている、世間体を考えてくれ、というように。

個人の意見が尊重されない、根拠なきルールに従うはずもありません。しかし、親の言う通り、先祖代々受け継がれてきた地域のルールは、理にかなっている点も多く、この土地で生きてゆくなら必要なことであったりします。そして、地域で波風を立てることは居心地の悪さを生みます。ならば、ルールに従う、つまり郷に従うほうが楽なのです。こうして郷はつくられていきます。

都会と地方の暮らしは何が違うか?僕は確信を持って言えることが2つあります。「公共性」と「多様性」です。

「公共性」とは、家の外に一歩出れば、そこは様々な人が暮らす公共の場という意識。誰かのものではなく、みんなのもの。知り合いしかいない場ではなく、不特定多数の他人と共存する場所。つまり、自分は誰かにとって他人だという意識です。道路も交通機関も公園も役場も、どんなに関わりがあろうと、みんなのものだということです。

「多様性」とは、世の中には色々な人がいると認めることです。言うなれば個人を尊重することです。色々な人がいるけれど、結局のところ他人なんだから、何から何まで知る必要はない。でも、相手の良いところを見つけて、個人を尊重すれば共感できることが増えてわかり合ってくる。一歩外に出て、公共の場に出たなら、こういう色々な人と暮らしていることに気づく。

これが、都会の人が自由に暮らしているように見える 社会構造じゃないでしょうか?

このように書くと「田舎の地域文化や風習に縛られて、世間体ばかり気にしていても、不自由になるばかりの暮らしだ」と思うかもしれません。しかし、実はそうではありません。どんなことでも表裏一体。人が受け継いできたこと、続いていることには理由があるのです。

今回、お話を聞いた川西町東沢地区の小方啓一さんは、僕にとって田舎暮らしの良し悪しを偏見なく教えてくれた人です。

都会の人にはわからないと決めつけられたり、地域の仲間意識の強さに疎外感を感じたり、いずれ都会に帰るんだからと喪失感を味わったり、都会の人だからと何かを期待されたり。都会生まれ育ちの人間が一人でこの土地に暮らすことは、こんなにも大変なんだと思い「やっぱりよそ者は一生よそ者で、地域の中で暮らすなんて出来ないんだ」と思っていました。

けれど、よくよく考えてみたら誰かに直接そう言われたわけではなく、決めつけていたのは自分自身。自分に都合の悪いことを地域のせいにして逃げようとしていただけなんじゃないか?乗り越えるべきは自分自身なのかもしれません。

家の居間に一枚の家族写真があります。母、妻、息子・娘夫婦、孫まで勢揃いした全員が笑顔の写真です。 十年前から同じ位置にあり、少し色あせてきましたが、そこには家族の中でも一際な笑顔を見せる小方さんの姿がいつまでも色あせることなく写っています。この写真を見るたび、小方さんが受け継いできたこの土地への想いと家族への愛情を感じ、写真に写る笑顔の先に、僕はこの土地での暮らしに希望が見えた気がするのです

2021年8月13日 塗貴旭

